

## 国際基督教大学 (ICU)

ICUは建学以来、人類の平和と共存に実践的な貢献ができる地球市民を育てることを教育目標としてきました。そしてその目標をさらに高いレベルで実現するための取り組み『信頼される地球市民を育むグローバル・リベラルアーツへ』が、文部科学省『スーパーグローバル大学創成支援』に採択されました。



**建学以来、国際的な環境で学びを展開してきた ICU にとって、今回の SGU とはどのような位置づけになるのでしょうか。**

国際基督教大学、International Christian University と名乗っている以上、常に国際、グローバルという言葉はついて回ります。そして“国際”と“グローバル”の違いについても考えていかななくてはいいないでしょう。

**ICU の考えるグローバルな人材とはどのような人ですか。**



今回、文部科学省からの指標には外国籍の教員がどれくらいいるのか、海外経験のある教員を一定数用意するとか、海外からの留学生がどれくらいいるのかなど数字として出すところがあります。この背景には日本の大学の国際的なランキングを上げたいという意図があるのでしょうか。日本には、医学系とか理系を中心にかなりの論文を世界に発表している大学は少なくありません。に

もかかわらずランキングが上がらない理由の一つに留学生の数、そして、もう一つが外国籍教員の数が少ないということがあります。ですからこの数を増やせばランキングは上がるはずですが、私は、この考え方は本末転倒だと思います。よい大学で世界中の人がそこで学びたいと思うような教育が行われていれば、留学生も集まります。そして、先生たちも世界中から集まる優秀な学生を育てたい、意欲ある教員が切磋琢磨して研究をしたいと思えば、その大学で教壇に立ちたいと考えるのではないのでしょうか。

そもそもグローバル人材とは、ただ英語ができる人というものではありません。私たちの大学では“異質な他者との出会いの中で、自分自身を位置付けることができる人”ととらえています。立場の異なる人、自分とは異質な他者との出会いを通じて、自分が何者であるかを考え、表現できる人。それがグローバルな視点を持っている人材といえるのではないのでしょうか。どんな人にとっても、自分なり

のアイデンティティを持つことは大切ですが、そこで自分のどんな面にアイデンティティの重きを置くのかは、人によって違ってくるはずです。もちろん“日本人である”というところに重きを置く人がいてもいいと思います。また現代では、帰国生をはじめとしてさまざまな文化の中で育ってきた人もいるので、複数の文化の中を一つのことに縛られずに行き来し、自由でいたいというところに自己同一化する人がいてもいいでしょう。どんな形であれ、自分のアイデンティティが何であるかをしっかり持った上で、自分とは異質な他者と交わり合うことがグローバルな人材には欠かせないことだと考えています。私はアイデンティティがずっと変わらないものだとは考えていません。成長や自分の置かれている状況に応じて変化していくもの、可変なものだと思います。異質な他者との出会いの中でアイデンティティを変容させていくことができる、そういう柔軟な人が真のグローバル人材といえるのではないのでしょうか。

**これまでグローバル人材の育成を行ってきたICUが挙げた、今回のSGUのテーマ『信頼される地球市民を育むグローバル・リベラルアーツへ』は、従来の教育とどんな違いがあるのでしょうか。**

今まで取り組んできたことの積み重ねを、21世紀にふさわしい形にリフレッシュしていくことは大切だと思っていますが、何か特別新しいことをするわけではないんです。ただ大きく変化するのが、4月に入学する学生と9月に入学する学生に対する教育支援です。開学の2年後である1955年から実施している4月生・9月生という入学制度においては、原則として4月生は日本の高校を卒業した学生、9月生は日本以外の教育システム、いわゆる留学生や帰国生、国内のインターナショナルスクール出身者です。これまでの4月生は、大半が日本の高校を卒業していることから、ICUで日本語と英語のバイリンガル教育を受ける際に不足しているのは英語力。そのため入学後は英語で文献を精読する力や論文を書く力、講義を聞く力、意見を発表する力をつけるためのリベラルアーツ英語プログラム（ELA）を履修してきました。一方の9月生はその逆で、英語力はあっても日本語のレベルはさまざまで、大学レベルの活動をするための日本語の語学力が不足している。そのため日本語教育プログラム（JLP）を履修するのです。すなわち、4月と9月、入学時期で完全に異なる語学教育プログラムを展開していたのです。

**入学後、まず4月生は英語を、9月生を日本語を鍛えるわけですね。**

しかし10年ほど前から、社会のグローバル化を背景に、4月生と9月生の入学背景に変化が出てきました。高校までの教育環境が多様化してきたために、4月生でも日本語で学術活動ができるようになるための教育を必要とする場合には、帰国生である9月生向けに開講している授業を履修できるようにし、9月生に対しても4月生のための英語論文作成法などを勉強できる教育を始めることにしました。この様な語学教育の柔軟化をはじめたのも、SGUの取り組みの一つです。

もう一つの変化は、入学選考の方法です。従来は4月生は一般入試や推薦、AO入試を利用し、9月生は全部書類選考で、いわゆるアメリカ型の入試。国際バカロレアや英語でのエッセイなどを通して全人的に受験生を見て入学の許可を出していくというスタイルでした。この9月生に向けた入学選抜の方法を4月生にも適応させていこうとしています。10年後には日本語、英語どちらの言語的背景や学修背景をもっている、4月と9月どちらでも入学できるような体制にしていこうと予定しています。

しかしこれらのスタイルを採用していくと、4月生と9月生に明確な違いがなくなっていくため、同じ教室で同じ授業を受けている学生の言語や学習の背景が今以上に多様化するという状況が出てきます。言語の能力も限りなくグラデーションになっていく。だからといってそのレベルすべてに合わせたクラスをいくつも用意することはできません。そのため授業一つひとつに対して、どの程度の語学力を持っている学生が対象であるかを明確にする必要があります。さらに2015年からは『学修・教育センター』という部署を発足させ、授業外で学生のサポートを実施しています。例えば学生から語学力に不安があると相談があれば、その相談に応じるだけでなく、さまざまな学修支援ツールの紹介なども行うのです。ICUでは録画をしている授業もあるので、その録画データを予習や復習のツールとして提供することもできます。そして学生だけでなく、教職員もこれまでと同じような教え方、支援の方法では対応しきれないケースが出てきますので、どのような授業の展開が効果的なのかという研究も実施していきます。特に多様な背景を持つ学生が混在するクラスをどう運営していくべきかということについても、この学修・教育センターでサポートを行います。ワークショップなども展開し、教員の教授能力を高めていくことも、SGUのテーマを進めていくためのコンテンツの一つです。

**学修教育支援の多様化ということですね。では今回のテーマにある『信頼される地球市民』とはどのような意味なのでしょう。**

過去に実施していた現代GPでは『責任ある地球市民を育むリベラルアーツ』というものを展開していました。地球市民とは、グローバル人材の別な言い方だと思いますので、リベラルアーツ教育によって優れた地球市民を養成する教育を行うプログラムを行ってきたことになります。今回、『信頼される』と言葉を変えたのは理由があります。これまでの『責任ある』とは、ある程度本人の問題であると思うのですが、それが『信頼される』となると責任を持つことはもちろん大切ですが、さらにそこへ相手が存在することになります。日本や世界の中で人に出会ったとき、相手からこの人は信頼に足る人物とみなされるかどうか、友だちになろうと思えるかどうかという意味になります。では、どういう人物が信頼される人かということ、一つは先ほどから話している通り、異質な他者との出会いによって自分を位置づけなおすことができる人であると思います。自分の立場にこだわりすぎると相手からは信頼されないですね。「私はこういう人だ」というのはあってもいいけれど、「人との出会いの中で自分ももしかしたら変わっていくかもしれない」という可能性があるということが大切なのです。そして『信頼される』もう一つのカギは、科学的思考を持つことだと考えています。

**科学的思考と信頼がどのように関わっているのでしょうか。**

東日本大震災で原発の問題が起きて、いろいろな立場の人がそれぞれに意見を出して、何を言っているのか解らなくなっていくということがあったと思います。専門家は専門家の集団の中では話が通じるけれど、分野が違う人に対しても解りやすい説明ができないといけないという意見がありましたよね。自然科学の先端的な研究をしている人の倫理観や歴史的認識に対する疑問も出ていました。しかしそれは理系分野の人だけの問題ではなく、人文科学や社会科学を専門としている人の自然科学的な能力も驚くほど低いのです。いわゆる理系の人には当たり前となっている、数量的な思考とか、仮説を立てて実験をして、その仮説を検証していくというプロセスの経験が少ないこと、それも問題だと感じています。そのためICUでは理系の科目を一定数履修し、単位を取得することも卒業要件の一

つとなるのです。

**理系と文系、お互いに歩み寄り理解し合おうという感覚を持つということでしょうか。**



ICUには理系のメジャーもあるため、数学、情報科学、物理、化学、生物などをメジャーとする学生もいます。しかしそれ以外の学生たちを見ていると、卒業のために必要とされる最低限の科目しか理系科目を履修していないケースが多くあります。今後は段階的に自然科学系の研究を専門としない学生であっても、もう少し理系の科目をきっちり履修し、数量的思考を高めることや実験・仮説を立てる力を高める力をつけられるような道筋をつけたいと考えています。なぜこの、文系メジャーの学生も理系の科目を履修し、科学的思考を身につけるということが『信頼される』ことにつながるのか。それはデータに基づいて自分の考えを発表できるということに

も関わっていくからです。データを正しく理解するには、それなりに数学の勉強をし、統計学の知識を持つことが必要。自分自身でデータを取れるようになるのは大変ですが、公的に発表されているデータを読み取る能力は身につけるべきです。そうすれば、グラフや数字を見て議論ができるようになります。そのような力をつける教育を展開していこうとしているのです。

**文科省もICUのSGUの内容に関して、この科学的思考を育てる教育を展開する点を評価していますね。これもICUの特徴的な取り組みになるのでしょうか。では、授業そのものの変更などがありますか？**

SGU推進室も発足させましたので、その推進室が事業をけん引する部署となります。学生や教員のためには学修・教育センターなど必要な環境を整えましたので、あとは方針として打ち出したことを一つひとつ進めていくことになるでしょう。

また、これもある種の『信頼される』につながるのですが、英語以外の言語教育にも力を入れています。ICUというと献学以来、日本語と英語によるバイリンガル教育を堅持していることから、充実した英語教育を行っているというイメージが強いと思いますが、これからは英語だけではグローバルとはいえません。これまでフランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語を開講してきましたが、2015年度からはイタリア語、アラビア語、インドネシア語が加わりました。これらの言語を加える理由は、例えばアラビア語はイスラム圏への理解を深めるため。インドネシア語については国際サービス・ラーニングでインドネシアの大学との関わりもあるため、学生がインドネシアに行く前に現地の言語を勉強してから旅立てる環境を作るという目的もあります。

ICUはグローバルリベラルアーツアライアンスに加盟しているのですが、そこにはイスラム圏やパキスタンの大学など、これまであまり縁のなかった地域の大学も参加しています。アライアンスではこれまでICUが学生を派遣してこなかった地域との学生の交流だけでなく、教員も各国の大学と一緒に新しいプログラムを作っていく展開もあるので、語学教育の分野を増やすことになったのです。



**相手の国の言葉で話す、ということも信頼につながりますね。**

そういうことです。

**アクティブラーニングについては、これまでも取り組んでいると思いますが、ICU に特徴的なスタイルはありますか？**

授業内でディスカッションなどを積極的に取り入れるだけでなく、5人程度で行うグループワークを重視しています。そのグループでは授業外の時間でも集まって、課題に合ったテーマを決め、最終的にはプレゼンテーションを行うことになります。その際、物理的に集まって一緒に議論をすることも大切ですが、時間を確保することが難しい場合も多い。その状況をサポートするため、バーチャルな場でディスカッションフォーラムを立ち上げるようなラーニングマネジメントシステムも作っています。授業の前にフォーラムにレポートをアップし、履修学生全員が事前に内容を読んでおけば、ディスカッションをするところから授業を始めることもできます。

授業に参加している学生は、その科目の内容を専門的に学んでいる学生もいれば、別な専門を持つ学生もいる。それぞれの視点で一つのテーマを見ると、違った意見や視点が飛び交うことになるため、一つのグループになるべく異なる専門を持つ人を集めたり、学年をばらつかせるなどの工夫をしています。それによってお互いに面白い刺激を得られるようです。これこそアクティブラーニングやグループワークの良さですね。

**多様な背景を持つ学生が一つの授業に参加することで、まったく異なる立場の人の意見を聞くことができ、視野が広がるということでしょうか。ラーニングマネジメントシステムによって対面に留まらずバーチャルな場でもやりとりができるようになり、グループワークの可能性も広がっているそうですね。**

**入試における国際バカロレア（IB）は、以前から取り入れていますが、今後の展開はどのようにお考えですか。**

そうですね。IBによる入学者選抜は1974年から取り入れていいますので、入試における今後の展開に大きな変更はありませんが、今後IB関連でぜひやりたいと思っていることは、IBに対応している高校で教壇に立つ教員を育成していくことです。ICUでは教員を目指す学生がとても多いんです。特に英語教員を希望する学生が多いのですが、もちろん他の科目の教員になりたいという学生もたくさんいます。ICUに入学する動機として「高校のときの先生がICU出身で、その先生が勧めてくれたから」という声をよく聞きます。私たちがいい教員を育てることによって、全国の高校に広がっていったICU出身の教員たちが「この生徒はICUの教育に向いている」と思う高校生に進学を進言する。これもある種の広報活動になると考えています。

今後文科省はIB校を増やしていく方針なのですが、IB校の教員ができる人はまだまだ不足しています。しかし英語ができ、かつ他の科目の教員免許を持っているICU出身者であれば、IB校の教員を目指すことも可能です。入試におけるIBということとは違いますが、教員としてIBと関わっていく学生を育てていくこと、それも私たちの特徴の一つになると思います。

## 高校生へのメッセージをお願いします。

中学時代も高校時代も学校が嫌いだったけれど、ICUに来たらとても楽しい、と言う学生がいました。今までの環境に満足していない、そんなあなたの場所がここにはあるかもしれない、と思います。新しい場所を求めている人に来てほしいですね。

ICUの大きな特徴であるリベラルアーツ教育は、入学してからやりたいことが選べます。高校生のうちから自分が本当にやりたいこと、向いていることが解っている人は、そんなに多くないと思います。そもそもどんな学問があるのか知らないでしょう？高校までの勉強のしかたでは苦手だと思っていたことも、大学で学んでみたら自分に合っていたという出会いがあるのもリベラルアーツ教育だからこそ。本人も思ってもみなかったと言っていますが、高校までは大嫌いだった科目をメジャーとして専門的に学ぶ学生もいます。人との出会いや海外での活動で、ものの見方が変わることも理由の一つでしょう。

ICUは一つの学部で構成されているので、自分が嫌いだと思っている科目を、好きだと思って勉強している学生が身近にいる、というように考えの違う学生と接する面白さがあります。学部が分かれている大学だと、身近にいるのは自分と関心の近い人ばかり。でもリベラルアーツやメジャー制の環境だと、「私はこれが嫌いなのだけれど、なぜあなたはそんなに好きなの？」と聞く機会があり、その話によってお互いに刺激を受けて考え方が変わります。また、メジャーとして選択している分野以外の科目も履修できますし、メジャー、マイナー、ダブルメジャーという学び方もできます。分野を横断して個性的な研究ができることも魅力になるでしょう。

ICUでは優秀な卒業論文に対して賞を与えています。その中には、一つの専門分野にとらわれない印象的な論文もありました。例えば経済学がメジャーで、情報科学をマイナーとした学生の論文では、自分自身でデータベースを作り、質の高い一次資料を自ら構築し、さらに分析までを行った点が評価されたというものもあります。通常、学部レベルの卒業論文では公に発表されているデータを使い、それを分析して論文を書いていきます。しかし情報科学をマイナーとして選択していたことで、データベースを作るところから卒業論文に取り組むことが可能となり、それが受賞の理由の一つになったのだと思います。また、物理を学びたくてICUに入学した学生が、たまたま社会学を履修して興味を持ったことをきっかけに、社会学をメジャーとして卒業論文を執筆した例もあります。その論文のメインのテーマは社会学ですが、物理的な考え方が生きていました。物理を学ぼうと入学した学生が、最終的に社会学へ進むのは、どこの大学でもできることではないですね。それができるのがICUなのです。

## 分野を越えた研究を評価してもらえるのも特徴的です。

一つの分野を突き詰める魅力もありますが、グローバルリベラルアーツの教育環境の中では多くの選択肢があり、本人が選び、組み合わせることで予想外の展開が期待できます。そんな学生の挑戦を支える環境が用意されているといえるでしょう。1年間の交換留学を経験し、留学先で新しいデータを集めたり、日本とは異なる授業を受けることで生まれるアイデアもあります。

**日本を離れてみて、新しい自分の価値観に出会えるわけですね。**

3年次に実施される1年間の交換留学は、現在5人に一人くらいの学生が参加しています。留学の制度もいろいろありますが、伝統的にはこの交換留学が主流です。しかし例えばクラブ活動に打ち込んでいる学生にとって、3年次という時期はクラブ活動の中心人物となっていることが多く、1年間日本を離れることが難しい。そこで留学をしないという選択をする場合もあります。そんな学生のために別な留学のチャンスがあってもいいと考え、夏にサマープログラムを実施している協定大学へ6週間の留学ができるプログラムや、1年次の夏に英語圏の大学で英語力を磨いてくるというプログラムも用意しています。留学のスタイルも多様化しているのです。

ICUは各国のリベラルアーツ大学で構成されている、グローバルリベラルアーツアライアンスにも参加しています。ここには2015年9月から実施されるグローバルスカラープログラムというものがあります。これはアライアンスに参加する大学で2名までの学生の受け入れと派遣を行い、3年次の後半から1年間、2か国の大学へ留学をするというプログラムとなっています。例えば金融に関心のある学生が、半年間は香港、その後の半年間はスイスへ行くというような選択ができるものです。学生は自分のやりたいことを考え研究計画を提出し、その目的を実現するにはどの国に行きたいかをしっかりプレゼンテーションします。そのようにして参加学生が選抜されるのです。これはこのアライアンスにとっても、ICUにとっても、初めての取り組みになるのですが、今後面白いことになるのではないかと期待しています。

**大学での学び方だけでなく、留学のスタイルも多様性がありますね。選択の可能性が広いことに戸惑わず、選ぶことを楽しめる学生が生き生きできる環境でしょう。**

多彩なプログラムがあるので、意欲があれば本当にたくさんのことにチャレンジできるのですが、誰にとっても1日は24時間しかありません。何かを選ぶには何かを諦めなくてははいけない。ICUに入学すればメジャーも、留学も、自分が考えて選ぶ機会が多くなります。言われた通りに履修するのではなく、自分で人生をプランする姿勢が求められるのですね。

自分で何をしたいのかを取捨選択しながら進む道を作っていく。それができるのがこの大学です。この自分の道を選ぶということは、これから一生続くことでもあります。大学に入った時点で、自分の将来を自分自身で作っていかうとする、そんな気概を持つ人に入学してほしいと思っています。

## インタビューに答えてくれた方



■ 日比谷潤子先生  
国際基督教大学 (ICU)  
学長

聖心女子学院高等科出身。上智大学外国語学部フランス語学科卒業後、同大学院外国語学研究科言語学博士前期課程修了。ペンシルヴェニア大学大学院アーツ・サイエンス研究科言語学博士。慶應義塾大学国際センター専任講師、助教授を経て、2002 年国際基督教大学準教授、2004 年教授（語学科（当時）、現在はメディア・コミュニケーション・文化／日本研究メジャー）、2012 年より現職。